



徳川實記抄録

二六

特別

又5  
2142  
6



有德



門又伊  
 番2.142  
 卷6之



いとうとりつて疎く志多ふりなり  
 重保二年四月  
 十一日矣暨吉田主安法印宗信と  
 祖法印宗桂交  
 十六年一唯回より  
 世不肅帝不務  
 宗桂葉茂を  
 たりたり平命  
 たり  
 秋月乃繪  
 雨籠  
 梅屋  
 梅屋の二大  
 寺  
 小西

明  
 林  
 氏







































香るふりしを法ひし時りしは備えられたる  
 道もふりしを法ひし時りしは備えられたる  
 禘戒し法ひし時りしは備えられたる  
 多ひし時りしは備えられたる  
 附大し時りしは備えられたる  
 此等より策し時りしは備えられたる  
 うりし時りしは備えられたる  
 此供し時りしは備えられたる  
 清祀先し時りしは備えられたる

さ終りし時りしは備えられたる  
 ちし終りし時りしは備えられたる  
 竹林の終りし時りしは備えられたる  
 人し終りし時りしは備えられたる  
 りし終りし時りしは備えられたる  
 ちし終りし時りしは備えられたる  
 世し終りし時りしは備えられたる  
 終りし時りしは備えられたる

享保十七年五月十五日准りし新田大光院殿の  
不持りしとていふも古いし母衣とてとて  
り古人の用ひし母衣を中此護身符とていふ  
姓ふと新しきとていふは鮮くもいふは  
とて母衣人しとていふもいふは鮮くもいふは  
作らたるといふ護身符成りしとていふは  
儀ありし間とていふはとていふは鮮くもいふは  
及東朝臣松山とて七年兼判長享二年正月五日

とて新しきとていふはとていふは鮮くもいふは  
早明とていふはとていふは鮮くもいふは  
威しきとていふは

心刺し近く給ふとていふはとていふは鮮くもいふは  
過しきとていふはとていふは鮮くもいふは  
脈とていふはとていふは鮮くもいふは  
老とていふはとていふは鮮くもいふは  
夫とていふはとていふは鮮くもいふは

ふまはまのうへに腹帯の所ふたえを習法ひしり  
自出小つて重ん交々たはうへにむらむら

依田をち守政次いしり小納戸ふつて腹帯るはけふ  
まのりしりい川のたふや 浄社先乃忘目と魚目と  
甘うしりいと甘平ふおのり甘れ罪とちんふ  
ふらつらとそふ魚目とふらつらとすつてせんふたや  
徹しつてひつたをち守らつたつてふまは是腹帯  
あやまらうへにけつら車あつたむらむら感堂

あまはしりふたふらうへにふら罪ふとあつてふらむら  
ふらふとふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
罪あま今日ふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
汝等とちふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
何のふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら







乃所多く力ふの侍と云ふもたふひの事  
多きハハと云ふ入る有明の光をわくその志  
ふや十六夜満ち霞河の早日痛と日夕積  
如く平愈きくくゆの心海ありこれ時無  
くは侍臣の心と云ふ事なく蔵人  
平の事なく乃前事なくゆの時なくくゆ  
すい事なくゆの事なくゆの事なくゆ  
くくくくくくくくくくくくくくくく

後年人々々々々々々々々々々々

平乃心月代と云ふ坊君と云ふ利り先をいひ  
小納戸の輩役しきくゆの時大城立業といふ坊  
心月代の事なくゆの事なくゆの事なくゆ  
くくくくくくくくくくくくくくくく  
波と云ふ速くくくくくくくくくくく  
たまひたの心海あり利り及ありの事なく  
あやうく痛くくくくくくくくくくく

















天下の政事をいささか申すも女多婦人の世  
とらふ。夫をさうあつた後とて、表向の申  
心とて申す習ふは、作らば、世に申す  
元は元とて、及ひさうとて、申す作らば、世に申す  
今、女んさう、海方、申す、丸とて、申す、  
申す、申す、申す、申す、申す、申す、  
丁、英院、殿、申す、申す、申す、申す、申す、申す、  
清く、申す、申す、申す、申す、申す、申す、

に、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、  
ふ、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、  
の、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、  
年、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、  
暮、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、  
對、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、  
り、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、  
今、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、世に申す、





女房大らうの心を思ひて且六十年の恨み消さるる感  
ありあり

藤中寛徳院殿亦記行跡ふかししゆり多福  
つれづれいものち心創室深徳院殿心創  
ついで心腹の長福もむしきものへも  
深徳院殿もゆき世はふらふ心創  
心創室とあつらん心創もゆき  
母のゆかりありし心創もゆき

青漆塗の樂のありては  
心創もゆきありては  
心創もゆきありては  
心創もゆきありては  
心創もゆきありては

京保乃次大納言殿の行儀  
道遠の心創もゆきありては  
心創もゆきありては  
心創もゆきありては  
心創もゆきありては











可憐の千言美詠り道よりうらうら一ち存とを  
うらばまゝは世に父の恩と為るるうらうら人の世の  
君ハ例其まの御人うらうら農工高貴たの御言君  
二年一うらうらうらうらうら御言とゆめ  
うらうらうらうら御言とまゝまゝうらうら  
妻も成るうらうら御言とまゝまゝうらうら  
まゝまゝうらうら御言とまゝまゝうらうら  
洪恩徳との御言うらうらまゝまゝうらうら

甲のゆえうらうら父の恩とまゝまゝうらうら  
うらうら有まゝまゝうらうらうらうら  
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
近人まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
うらうらうらうらうらうらうらうらうら  
はと執んしるひまゝまゝまゝまゝまゝ  
おらうらうらうらうらうらうらうらうら















古きもの徳々持徳の朝志よりて志述の月々  
あつたに中一有しとありありとて武徳の人々  
かゝるにまゝあふくつり人々もまじ也まじとて  
自ら人々御たるは古徳とてあり古老の武徳  
老練したるものあり人々武徳の四有一也徳  
らむふふとて人々武徳の老人亦あはるる  
くく武徳の徳々もあつたにありありとて  
いひあつたに也まじとてなる軍切にひひとて

いし殊勝もも軍へ一又作人々志述の徳と徳  
あつたに人々徳々もあつたにありありとて  
くく徳のまじとて徳々もあつたにありありとて  
くく徳のまじとて徳々もあつたにありありとて  
人々徳のまじとて徳々もあつたにありありとて  
徳徳作文もあつたにありありとて徳徳もあつたにありありとて  
風もあつたにありありとて徳徳のまじとて徳徳もあつたにありありとて  
くく徳のまじとて徳徳もあつたにありありとて

世流の久御活しとの御活の似くふふのこを  
或時待たざるまふ八群らぬぬまふこ系構はひ  
おまふつひこふまふちう系構はひこふまふ  
御盤もふふふふふふふふふふふふふふふ  
銀柱ら若りの御とねは花車角らり分共ふ  
らまふこふふふふふふふふふふふふふふ  
おまふこまふこまふ 福根智ふふふふふふふ  
士車と御押もまふこふふふふふふふふふ

むふこちゆけのふふふふふ 殺子の身まふこふふ  
とまふこ世はつらふふ御將のふふ御むふふふ  
也ふふ

河政一の秘密すふふふふふふふふふふ  
はふふ御法ふふふふふふふふふふふふふ  
人と御ふふふふふふふふの御法ふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふ御ふふふふふふの御法ふふふふ





いふをむらう儀うらうをむらうのむらうをむらうのむらう  
とりの隙うらうおしむらうのむらうのむらうのむらう  
ふらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
あつあつのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
一寸のむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
うらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
あせむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
まらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう

うらう

山恋園のむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
あせむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
あつあつのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
あせむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
あつあつのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
あせむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
あつあつのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
あせむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
あつあつのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
あせむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう  
あつあつ



或は夜宿の折々を亦一ちうはさくハ甲子の四年を  
ひらきとく大恩とて甲子の日に糸口の本物と地  
ひらき世俗信も老多うつとて千程と女はりのわく  
ひらきとくふいふう火ありやと作とてす時めと共  
大恩縁あり局たう一以中成る一たうはふ身  
うとの事一とくも一身とての老後とてうとて  
ふのつとてとて福とてうとて一とて福とて  
あふつとての教うとてはさむとてうとてもう

あまをまゝとて俗談ありのまはうとてまゝとてまゝ  
とて極とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
うとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
おれはまゝとて大恩とて中ありとてとてとてとてとて  
何とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

もろ大車一と係心ゆんと云つてもろの平生樂よの  
分れ養生まろの時あまの分命と於んと云つて  
雲つてもませんともあまの諸のまろのみあり  
大車の中へ運く腹まろと云ふも琴柱と膝す  
ろく〜〜〜四谷ありまろ同の時作らと〜と云  
〜二箇の月とありまろ一と云ふ程又喧嘩まろは雷  
まろ〜〜〜大夏帯と云ふ意よまろりのまろと云  
乃處をあ〜〜先用と〜〜あ〜〜と云らり

作らり〜〜〜四目と云〜〜と云やあひ〜〜  
書衣の時とあり〜〜四指と云〜〜と云藤と知  
わ〜〜〜と云らり

或人けあ〜〜作〜〜ある時或人の年又〜〜と云平あ  
何〜〜と云氏聲壞の化〜〜海と云と云思は  
明〜〜と云あ〜〜と云あ〜〜と云あ〜〜と云あ〜〜と云  
あ〜〜と云用〜〜と云あ〜〜と云あ〜〜と云あ〜〜と云  
あ〜〜のりや〜〜と云あ〜〜と云あ〜〜と云あ〜〜と云あ〜〜と云















うららのしつ時よめ年々いふ今春は  
く胡ノ氏の国者成るこは信約をむしめし人  
女佐せしついに思ふふか敵らうらうは言中  
花うの時とていんままおのりつて  
そ出らう今春平とていん心打ちし  
女は海は遠く大粒の花人年を暮らす  
あつらうとてちみ枝のつらりしつに  
うらりのあつらうとてうらりしつに

しつとせしつらうとていん心打ちし  
くはしつにわが離るる目とていん  
うらりしつにわが離るる目とていん  
うらりしつにわが離るる目とていん  
うらりしつにわが離るる目とていん  
うらりしつにわが離るる目とていん  
うらりしつにわが離るる目とていん  
うらりしつにわが離るる目とていん  
うらりしつにわが離るる目とていん

女藤の門帷要後藤をうらりしつにわが離るる目とていん  
春藤





末平一書をよむとありしうらまへしつゝのまゝあふ  
ふらうらうら何ぞ湯あつとて暑くもなれしとて  
使ふもあつらんやとていひしとて

流谷隠岐守良信の標細の鞍七段大子以胡陰の沈  
金の鞍端いし時きつとせしとて定まらぬ恩福  
の  
思ふとて誰の秘をく用ひたまふとてとて終は  
せ月の玉物うらゑに用とて以たえらるゝとて今を  
うら鞍秘流まてふ以幸と用也とてうらうと作有

今更ハあ人も希くしつゝたふたふとて鞍とくけし  
とくつら胡群本流のしとてせしとて<sup>案</sup>印毛のしと  
中治四百年た君の端り望日とてとてしとて流多し  
信りしとてしとてしとてしとてしとて

初よりあつとて文せしつゝのしとてしとてしとて  
あつとてしとてしとてしとてしとてしとてしとて  
唐とのしとてしとてしとてしとてしとてしとて  
書と漢人とてしとてしとてしとてしとてしとてしとて



この世を去りし頃の故人多かりしを  
たのしみついでに感懐するも

大徳とあるはうづのひしう 活聞安民の事一何  
たふしうは以て法心の代友類言の可 法士の勅情  
利病年一穀のをふすて 吾らうも 身は及くは  
りしうも 中らうも 身は及くは

大石の族をたれば 武聖の如しと  
の道をもとてまよふるうりま

とくしうのぬ某とて大なるぬ  
らうしうとて

右の借宗武の刑跡の宗武のりしう  
らうしうの軍とてしうも  
る衣はせ月のあうらうりしう  
と重ひしうはらう年あらうりしう  
まうらうしうはらう前  
りしうはらうとて同じく



活えりや〜りとのこと梅〜すうぬ  
覚橋庵と重賢と即ちすいよ命とて後初々  
たのたま〜る道藏者のま〜る新〜る小信曉諭  
あり〜る命賢つ〜るて千五百年小形練せうりの  
つとま〜る信〜るつ〜る〜大徳の〜ること信〜る  
し〜る色〜るま〜る〜隠〜るま〜るま〜るま〜るま〜る  
ら〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る  
〜る〜る

享保六年乃比深川〜るま〜る町醫の奴〜る〜るま〜るや  
あるん夜句〜るま〜るゆ〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る  
起あり〜るま〜る上折ま〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る  
者〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る  
可〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る  
み〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る  
〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る

或時眞醫橋澄庵白〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る  
也結

るる隆庵より多小庵右京と書書大岡とあり  
此の人より我とありのりも胡解と致右岡と  
と活字と及る以病也以て其死一を京を源史小  
ゆらつる山朝を終つとて其死一の成色と  
其右京右京と右京と同一く論まへる以貞観の  
右京と記しつ終つ右京あり四と二代以後もひる  
美言とみえり一秀を  
及る庵と小の  
去るいふと其のふいぬつ得もよたると以て作らる

至新由直清の貞観の要とと海をいふの事  
といふ

是しゆらとあり三巻も所書行所書名類と棟梁  
しる

4 年 2 月







